



外国人研究職員の紹介

Prof. Amalendu Chandra

from India

Indian Institute of Technology (IIT) KanpurのAmalendu Chandra教授が、平成29年5月から平成30年度末まで、理論・計算領域の客員教授として滞在される予定です。Chandra教授は、Indian Institute of Science（バンガロール、インド）のBiman Bagchi教授の下、液体論とくに分子流体力学に基づく溶媒とダイナミクスや誘電摩擦などの理論研究で1991年に学位を取得されました。その後、British Columbia大のPatey教授のグループでのポストドクを経て、1993年に助教授としてIIT Kanpurに戻られ、2001年からは教授として様々な研究を展開されています。2002年にサバティカル制度を利用してルール大学（ボーフム、ドイツ）で1年程滞在した際に第一原理計算を習得され、その後、第一原理計算を利用した超臨界状態や亜臨界状態の液体構造の解析や二次元赤外スペクトルの解析にも研究を展開されています。さらに、固一液、液一液、気一液などの界面近傍や制限空間の構造やダイナミクスなど、第一原理計算の特徴を利用した解析など精

力的に進めておられるインドの理論化学者の中心的人物です。

IIT Kanpurはインド独立後、1960年代前半までに5校開校されたIITの一つであり、多くの理論研究者を抱えるインドの理論研究の拠点の一つです。IIT Kanpurのキャンパスは広大で、朝早くにはゲストハウスの中庭をクジャクが散歩しています（IIT Kanpurでは、'Birds of IIT Kanpur' という本を出しているほどです）。Chandra教授はIIT Kanpurの研究担当理事を務めてこられました。その任期が一旦終了するのを契機に分子研に滞在してもらえることとなりました。数十人のゲストを招待しても問題ない広い庭付きの家（官舎）に住んでおられるChandra教授が日本の住居環境をどう思われるか興味深いところです。

（斉藤 真司 記）



Chandra教授（左から二番目）とご家族。

も感動として伝わってきました。

人工クモ糸の素となるタンパク質の粉は糸だけでなく、フィルム、スポンジなど様々な形態に加工することが可能で、欲しい特性を持った材料を自由に作れるようになる可能性もあるとのことでした。現在はホテルや保育所を備えた巨大なバイオサイエンスパークの建設計画もあるそうで、所在地の鶴岡市にとっても喜ばしいお話だと思います。今回の講演では、タンパク質と遺伝子デザインの魅力だけでなく、目標に向けて何もないところから組織を作り上げていく様子にも惹きつけられました。参加された小学生からは「クモ糸でできた服は触り心地がいいですか？」との質問が出るなど市民の皆さんは興味津々で、講演終了後も菅原氏の前に並んだ長い列がなかなか捌けない様子でした。（木村 幸代 記）

